

新撰
日本文典

文及文の解剖

全

文及文の解剖

新撰日本文典

全

高師範學校教授

岡倉三郎著

東京
有朋堂發行

明治三十三年

本文典
新撰曰

文及文の解剖

は志がき

文法書と名のりて、わが讀書界に顯るるもの、今もなほ尠からざれども、多くは品詞個々の説明にくはしく、文章の構造に至りては、之を記せる書、甚だ稀なり。されば形容詞の續けざま、動詞の活用など、所謂單語論に關する事どもは、學生のあまりに難しとせざる所なれども、文格に就きての智識は極めて薄く、特に文章解剖法の如きは、其最も困難に感ぜる所なりとす。

本書の目的は、目下のこの缺陷を補ふ一助にもとて、本邦語の骨格の大體を述べ、この道の初學者のために、文章解剖

法の要義を説き明かすにあり。編成の際は専ら教授の便宜を謀り、努めて學說の上の議論を避けたれば、解析の様あるひは固陋に失したりやも知るべからず。特に新奇なる名目を多く設けたる點に於て、世人の惑を引く虞ありと雖も、こは新しき方式を行ふに當りて、必然生ずべき事。大方の博識たち、深く之を咎むることなく、本書を幫けて其世に出でたる主意を達しえしめたまはば、著者の本懷またこれに過ぎざるべし。

明治三十四年二月十二日

著者しるす

凡例

一、本書の内に採り用ゐたる語の切りわけ方は、概して左の方針に依れり。

(一)山川行く見ずの如き一個の獨立せる觀念を示すものを一つの語とす。

(二)が、の、に、をの如きもの、及び其相重なれるものをも亦一つの語とす。

(三)見き行きたり思はざりしか白からざりしならんの如く、用言に活用ある助用言の添へるものは之を一つの語とす。

(四)どもばの如き活用なき助用言は之を一つの語と見做す。

(五)かの、この、その、わがの如き連軀の代名詞は、之を一語と定む。然れどもかれの、これの、われがの如きの又はがを離して獨立せしめ得べきもの、及び主格のわがはこの限りに非ず。

(六)まれに、明かに、はたと、奇妙なり、公然たるの如きは之を一つの語と定む。

二、本書に説き試みたる圖式は、ジュエル氏の解文圖式に鑒み、余が新に立案せしものなり。創定の事とてなほ改良し得べき點おほかるべしと雖、このままにして、既に

(一)文章の各部の關係を一目に認め得る事、

(二)圖式の指定のまにまに語句を配列せしめ得る事、

(三)原文を用ゐずして文章の格式を示し得る事、

(四)二個以上の文の組織を畫圖を比較すると同じく、引き比べ得る事、

等の長所あり。中等教課の國語教育の上より見て、確に一顧の價值あるを信ず。

三、本書の大體の結構は、之をガウ氏の英語教授書第一篇に採れる所少からず。

附記

金井保三氏は、本書の編成につき種々注意を與へられしのみならず、余がために校合の勞をさへ取られたり。依りてその由を茲に特書し、同氏に對する余が深き謝意を陳ぶ。

二月十二日

著者また識す

新撰日本文典 文及文の解剖目次

第一課。語——文——主部——叙述部……………

(一丁)

第二課。單文——主語——主語——助主語……………

(二丁)

第三課。叙述語——用言——助用言——助辭——句——主

(四丁)

第四課。自用言——他用言——目的語——目的句——目

(五丁)

第五課。不全自用言——不全他用言——不全用言——

(六丁)

第六課。連主語——連主句——連主詞——兼主連主詞

(七丁)

第七課。連用語——連用の主語——連用句……………

(八丁)

第八課。文の成分……………(十四丁)

第九課。文の成分——語句の順序……………(十七丁)

第十課。文の解剖——口頭の解剖——解文圖式……………(十九丁)

第十一課。獨立文——連牀文——成牀文——連用文……………(二十三丁)

第十二課。附屬文——混合文——混合文の解剖……………(二十五丁)

第十三課。叙述の語法——叙述の時相——獨立の複合

文——緊約複合文……………(二十八丁)

第十四課。附屬の複合文——複合文——接續詞……………(三十丁)

第十五課。複合文の解剖……………(三十二丁)

第十六課。獨立語——獨立句——呼びかけの獨立語——

提示の獨立語——獨立詞——獨立部——感動詞(三十六丁)

目次終

新撰日本文及文の解剖
本文典

岡倉由三郎著

第一課

(1) 山。猛獸。かの。住めり。高し。おほく。
きはめて。は。に。

(2) の如く、きれぎれの意味を示す、一つのことばを、語と云ふ。
△かの 山 は きはめて 高し。

△猛獸 おほく かの 山 に 住めり。
の如く、まとまれる意味を示す、語のあつまりを、文と云ふ。

(3) 語、おほく集まれりとも、其中に、主部、即ち、
「きはめて高し」に對する「かの山は」

「かの山におほく住めり」に對する「猛獸」の如き、説話の題目と成れるものを示す部分なき時は、意味まとまらず。故に、その部分なき語のあつまりは完全なる文に非ず。

語、おほく集まれりとも、其中に叙述部即ち、

「かの山は」に對する「きはめて高し」

「猛獸」に對する「かの山におほく住めり」

の如き、説話の題目と成れるものに就きての叙述を示す部分なき時は、意味まとまらず。故に、その部分なき語のあつまりは、完全なる文に非ず。

練習

一語とは何ぞ。

二、文とは何を云ふか。

三、如何なる語のあつまりが完全なる文にあらざるか。

四、文の主部とは如何なるものぞ。

五、文の叙述部の定義を問ふ。

六、次の文の主部と叙述部とを指摘せよ。

(一) 美しき花所々に咲き満てり。

(二) 誰も皆行儀よく手習せよ。

(三) 嵐山の前面の長き橋は渡月橋なりや。

(四) 古の福原は養和の帝の新都なりき。

(五) すめら御國の武士は如何なる事をか務むべき。

(六) 日ははや西に沈みたり月はずでに東に昇りたり。

(七)紅葉は散りぬ時雨は晴れぬ。

(八)良運なり幸福なりこの時に遭遇せる日本人は然れども殊に幸福なるは海陸軍の軍人なり古來幾多の戦争に於けるが如く彼等は同胞人と戦ふ者には非ず。

第二課

一つの主部と、一つの叙述部とより成れる文を單文と云ふ。次の如き文は、いづれも單文なり。

△その山は高しや。

△猛獸もおほく住めり。

△我が國はきはめて良き國なり。

單文の主部は、ただ一つの語より成れる事あり。

△星 稀なり。

△理由 明かならず。

△惡人 悉く その 罪 に 伏せり。

の星理由惡人の如きこれなり。

一個にて主部を示せる語を主語と云ふ。主語は星理由惡人山猛獸國の如く、いつも事物の名を示すことばなり。事物の名として用ゐらるる語をば、概して躰言と云ふ。

△紅葉 を かざして 山 より 歸る。

△彼の 子 は 君 の 從弟 を 知れり。

に於けるをよりのはの如く、躰言の後に附きて、其關係を示す語を助躰言と云ふ。

練習

一、單文に定義を下せ。

二、牀言とは何ぞ。

三、助牀言の任務を問ふ。

四、身牀に關する牀言を主語として五個の單文を作れ。

五、農業に關する牀言を主語として五個の單文を作れ。

六、工業に關する牀言を主語として五個の單文を作れ。

七、商業に關する牀言を主語として五個の單文を作れ。

八、左の文はいくつの單文を含めるか。

(一) 行くては遠し夜は深し余に宿かす人はなし。

(二) 笑ふ子は我が子なるか哭く聲は我が子の聲か迷へ

る母のあだの夢なりわが子は早や哭きもせず笑ひもせず。

(三)勉強は事を成就するに最も必要な條件なり然れども勉強家は決して世に多なるに非ず。

(四)嗚呼寛なる哉大なる哉日本國の度量開闢以來數萬の外人の歸化を容れたり。

九、以上の文の中の躰言を列舉せよ。

第三課

單文の叙述部は、ただ一つの語より成れる事あり。次の文に於ける高し、散りぬ、ありの如し。

△かしこに見ゆる山は高し。

(10)

△峯 の 紅葉 散りぬ。

△きはめて 良き 人 あり。

一語にて叙述部を示す語を、**叙述語**と云ふ。叙述語は、いつも高し、散りぬ、あり、知れり、歸る、居らずの如く、事物の有りさまたは動作を叙する語にて、事物の用を説くものなり。事物の用を説くために用ゐらるゝ語をば、概して**用言**と云ふ。

△雨 降ら ば 行か じ。

△この 本 は 薄けれ ども 重し。

に於けるば、じ、どもの如く、用言の後に附きて、其運用を助くる語を**助用言**と云ふ。

助軀言と助用言との二つを、總括して**助辭**と稱ふ。また軀言に助辭の添へるもの、用言に助辭の添へるものは、いづれ

(11)

(12)

も一つの句なり。

主語も主句も、皆之を概稱して主詞と云ひ、叙述語も叙述句も、皆之を概稱して叙述詞と云ふ。

(注 意)

主詞又は叙述詞は、意味の不明をきたす虞なき場合には、冗漫を避くるためわざと省略して、文の表に示されざる事あり。『汝、どく行け』の『汝』、君は昨日いつこへ行きたまひしかの君は、『何か見ゆるか』と云ふ問ひに對する、『山が見ゆ』の見ゆの如きは、屢々省略せらる。

練 習

一、用言とは何ぞ。

二、助用言を例を擧げて説明せよ。

三、勉學に關する用言を敘述語として五個の單文を作れ。
四、運動に關する用言を敘述語として五個の單文を作れ。
五、料理に關する用言を敘述語として五個の單文を作れ。
六、左の文の中の用言を指摘せよ。

(一)進め矢玉の雨の中飛びこめつるぎの霜のうへ我が
日の本の國の名を世界に擧ぐるは今日なるぞ。

(二)往け往けやまと男子千歳の一遇ぞ開闢の昔より鍛
へたる我の腕試すは今の時失ふなこの機會。

(三)國産を交換して互に其足らざるを補ふをば貿易と
云ふ。

第四課

用言に、事物のありさまを示すものと、動作を示すものと、あり。次の如し

ありさまを示す用言 …………… 清し。濁れり。

動作を示す用言 …………… きよむ。にぎす。

清し、濁れりの類は、そのままにて意味明かなる用言なれば、ただちに叙述詞として用ゐらるものなり。ありさまを示す用言には、かく自立して叙述語と成りうる力あるを以て、之を**自用言**と云ふ。

きよむ、にぎすの如きは、しからず。其示す動作の歸着する事物を指す部分なくしては、意味落ちつかざるなり。即ち、きよめらるるものに、にぎさるるものなくしては、その意味明かならず。かく、目的を示す部分の力を借らずしては、十分なる

(17)

叙述をなしえざる用言を、他用言と云ふ。

△君側 を きよむ。

△井水 を にごす な。

に於ける君側、井水の如き、他用言の示す動作の落ちつく事物を知らする、終言を、目的語と云ふ。目的語は、通常助辭のをに伴はれて、一つの句を成せり。

目的語と目的句とを概稱して、目的詞と云ふ。

(注 意)

(ア)目的詞も省略せらるる事あり。「校則を犯さ」かの間ひに對する「校則を犯しき」の校則を、の如きは、わざと略して、語句の冗漫を避くるが常なり。

(イ)國を出づ「山を越ゆ」「川を渡る」に於ける如きをは、「よりに通ふを」にて、「國を治む」「山を開鑿す」「川を止む」などのをとは趣かはれり。彼は其附ける終言が、用

(18)

言の示せる動作の直接に行き當たるものなる事を示し、これは其附ける体言が用言の示せる動作の経過する道筋なる事を示すなり。されば、かかるをの添ひて成れる句は、之を目的句と云はん事、穩かならず、一種の連用句（三一節参照）として扱ふべし。

練習

一、自用言とは何ぞ。

二、他用言とは何ぞ。

三、目的語とは如何なることばを云ふか。

四、目的詞を有せる單文五個を作れ。

五、左の文の誤謬を正し其理由を示せ。

(一)この小刀は良く切らず。

(二)醫者は病を癒ゆる事を掌る。

(三)あの猫は昨日も鼠を三匹臺所にて捕られき。

(四)こまかき字を讀むる人は眼の良き人なり。

六、左の文の中のをは同じものなりや異同あらば之を説明すべし。

何をもとめん心なく森の樹の間をわけゆけば巖のかげにさざん花の色なつかしくさきにほふ。

七、左の文の中の目的詞を指摘せよ。

血をもて色どれ日の御旗骨もてかためよ國の基必死をきはめしつはものの背にこそ凱歌は負はるなれ。

第五課

△かの人は悪人にあらず。

△君も有名なる學者となれ。

に於けるあらずなれの如き用言は、動作を示す語ならねば、他用言にあらず。その質きはめて自用言に似たれど、悪人に學者となど云ふ補助の部分を得ずしては、心通じがたし。故に常の自用言とは異なり。

△世人彼を愚なりと云ふ。

△縣下の人君を代議士に選ばん。

に於ける云ふ、選ばんの如き用言は、ありさまを示す語にあらねば、自用言に非ず。彼を君をの如き目的詞を有せるをみれば、はなはだ他用言に似たり。されど、愚なりと、代議士になど云ふ補助の部分なくては、其意味落ちつかず。故に、常の他

用言とは異なり。

あらず、なれの如きを不全自用言と云ひ、云ふ、選ばんの如きを不全他用言と云ふ。またこの二つを通じては不全用言と名づく。

不全用言の意味の不足を補ふため添ふる語を、補足語と云ふ。補足語は通常助辭のに又はとに伴はれて、一つの句をなせり。補足語と補足句とを稱して補足詞と云ふ。

(注 意)

(ア)不全自用言ありは、助辭のに又はと合して、なり又はたりとなる事常なり。かの川は大堰川なり、臣、臣たらずの如し。この場合には、大堰川、臣の類補足語にして、なりたりは各、一個の不全用言をなせりと知るべし。

(イ)また如しと云ふ不全自用言に限り、其補足語の體言なる場合には、之にの

を添へ、用言なる場合には、之に^訓を添へて、補足句となす。「落花雪の如し」、「大國を治むるは小鮮を養るが如し」の類なり。

(ウ)富士山は駿河にありのあり、車夫、車に客を乗すの乗すの類は、駿河に車にの如き句を扣へたる點に於て、不全用言によく似たれど、しからず、その故は、駿河に車にの如き句は、其無くてかなはぬ意味を補ふための補足詞にあらずしてある處乗する^{傷處}を云ひ添へて、已に一通りは不足なき意味を一層明かにするための修飾の句なればなり。畢竟、「此本は昨日よりこゝにあり」の「昨日より」こゝに又は、「地球は西より東へ廻轉す」の「西より」「東へ」と同じく、句なりと知るべし。思ひまがふべからず。

(エ)補足詞も、主詞目的詞等と同じく、省略せらるゝ事あり。君の犬は獵犬に似たりとの間に對し、たとひ似たりとのみ云ふ類なり。

(オ)まれなり、美麗なり、判然たり、公然たりの類は、分けて二語とせず、一語として之を扱ふ。また、まれにはあらず、美麗になる、判然とはせざれど、公然とならばなどに於けるまれに、美麗に、判然と、公然とは不全自用言の意味を補ふ補足

詞なり、之を連用語（二八参照）と混同すべからず、見る間に益々太くなる、さほど白くはあらずなどの太く、白くはも亦補足詞なること、勿論なり。

練習

- 一、不全自用言と常の自用言との差を問ふ。
- 二、不全他用言と常の他用言との差を問ふ。
- 三、補足詞のみを含める單文五個を作れ。
- 四、補足詞と目的詞とを含める單文五個を作れ。
- 五、左の文の叙述語は、不全用言なりや何故に不全用言なるかまた何故に不全用言ならざるか。
 - （一）誰がこの時計を君に贈りしか。
 - （二）人皆君を親切なりと云へり。
 - （三）おたまじやくしが蛙になる。

(四)長者には席を譲るべし。

六、左の文の中の不全用言を指摘せよ。

(一)春の月は春の花に如かぬが如く秋の花もまた秋の月には及ばず。

(二)其うしろ影は次第に遠く次第に小さく且つ次第に薄くなりゆく。

第六課

△白き 鳥 碧き 水 に 浮べり。

△この 老いたる 盲人 は 長き 杖 を 持てり。

に於ける白き碧きこの老いたる長きの如き語は、鳥、水、盲人、杖など云ふ牀言に連なりて、之を修飾せるものなり。かかる

(24)

語を連躰語と云ふ。

連躰語にして常の他用言より成れるものには、目的語を添へて、其意味を明かにす。次の如し。

余を 知れる 人は 誠に 慚し。

(25)

連躰語にして不全用言より成れるものには、補足詞を加へて其意味を明かにす。次の如し。

△かの 山 は 白山 に 似たる 山 なり。

△君 を 議長 に 推選せし 人 なし や。

△十頭 の 馬 に 西洋 の 鞍 を おく。

△君 の 杖 は 僕の 鞭 より 長し。

に於ける十頭の西洋の君の僕の如き句は、馬鞍杖鞭など云ふ躰言に連なりて、之を修飾せるものなり。かかる句を連

躰句と云ふ。

連躰語も連躰句も皆之を連躰詞と名づく。連躰語は、語句の冗漫を避くるため省略せらるる事あり。また連躰詞は、其連續すべき躰詞を攝して、躰言の役をも兼ねる事あり。これを兼躰連躰詞と云ふ。次の如し。

△余は紅き花より白き(花)を好む。
△かしこに立てる(山)は富士山なり。

(注 意)

(ア)かの庭には梅は一本もなし、猶十匹は鼠千匹より強し、彼等は皆一人前の戦人なり、吾々はいづれも鹿見島の者なり、等に於ける一本も十匹千匹、皆いづれもの如き語は梅猶鼠につきて其數量を示すものなれば、その質きはめて連躰詞に似たれど、其いづれも躰詞の後に置かるる點に於て、常の連躰語とは

異なり、かかる語は數量を示す語句に限れば、これを數量の連躰詞と名づけ他の連躰詞と別に扱ふを便なりとす。示數連躰詞と雖、助辭のに連續する時は、他の連躰句と同じき續けざまなる事は、十頭の馬と云ふにて知るべし。

(イ)「ナボレオン第一世も、彼等外人はの第一世、外人なども亦一種の連躰詞なり。

練習

一、連躰詞とは何ぞ。

二、兼躰連躰詞とは何ぞ。

三、連躰詞を有せる單文五個を作れ。

四、他用言より成れる連躰詞を添へて三個の文を作れ。

五、不全用言より成れる連躰詞を添へて三個の文を作れ。

六、數量の連躰詞を添へて五個の文を作れ。

七、左の文の中の連躰詞を指摘せよ。

(一)朝日に輝く日の丸の旗閃く皇國の軍艦どもよ千島のはてより沖繩までも開闢このかた異國の敵に一度も今まで穢されざりし貴き海岸守れや守れ。

(二)製紙の初はバヒラスと云ふ原料を用ゐて之を製せしに起こりし由なりバヒラスはナイル河に多量に産する一種の葦なるが製紙の術はたしてイザプト人の間に發明せられしものなりや明かならず。

第七課

△支那の面積はなほだ廣し。

△彼はたびたび洋行せし人なり。

(29)

に於けるはなはだたびたびは廣し、洋行せしなど云ふ用言に連なりて、之を修飾せる語なり。かかる語を連用語と云ふ。連用語の中には、牀言よりなれるものあり。かかる連用の牀言は、牀言たる資格を失はざるを以て、之を修飾する語句は連牀詞なり。たとへば、

△余 も その 翌日 歸國 しき。

△くはしき 事 は 再會 のをり 語らん。

の翌日、をりは牀言よりなれる連用語なるを以て、これに係るそのと再會のとは共に連牀詞なるが如し。

連用語にして、常の他用言又は不全用言より成れるものには、目的詞又は補足詞を添へて、其意味を明かにす。即ち、

△力を きはめて 助 を 呼ぶ。

(30)

△霜 は 雪 の 如く 白し。
 に於て、常の他用言なるきはめてに力をを、不全用言なる如しに雪のを添へて、各の意味の不足を補ふ類なり。但し、かの山きはめて高しのきはめての如く、用言としての力を失へる語は、この限りにあらず。

△親 の 恩 は 海 より 深し。

△地球 は 西 より 東 へ 廻轉す。

に於ける海より、西より、東への如き句は、深し、廻轉すなど云ふ用言に連なりて、之を修飾せる句なり。かかる句を連用句と云ふ。

連用語も連用句も、皆之を連用詞と名づく。連用詞は、語句の冗漫を避くるため、わざと省かるる事あり。

練習

- 一、連用詞とは何ぞ。
- 二、連用詞と補足詞とは如何に異なれるか。
- 三、連用詞を有せる單文五個を作れ。
- 四、連用の躰言とは何ぞ。
- 五、他用言より成れる連用詞を添へて三個の文を作れ。
- 六、不全用言より成れる連用詞を添へて三個の文を作れ。
- 七、左の文の中の連用詞を指摘せよ。
(一)彼は今いづこにあるか。
(二)獅子はすこしもおそるる色なく人を襲ふ。
- 八、左の連躰詞を連用詞に變へよ。

白き。青き。おそろしき。不思議なる。
めづらしき。黒色の。稀なる。

九、左の文にそれぞれ似合はしき連用詞を添へよ。

(一)雨降る。

(二)盜賊時計を盗み去れり。

(三)わが犬は隣の鶏を追ひかく。

第八課

一つの單文は、その叙述語が常の自用言なる場合に於て、
左の四成分を含む事を得。

○主詞 零語主、

△主の屬部 零語主、屬

主部

○叙述詞 零語叙、……

叙述部

△叙の屬部 零語、叙、屬

但し屬部とは、牀言又は用言に添ひて之を修飾する一切のことばの總稱なり。

今例を擧げてこの四成分の組み合せを示せば、

(一)鳥 鳴く。(二)萩 咲けり

の如きは主詞と叙述詞とより成れるなり。

(一)白き 鳥 鳴く。

(二)庭 の 萩 咲けり。

の如きは主詞と主、屬と叙述詞とより成れるなり。

(一)鳥 面白く 鳴く。

(二)萩 美しく 咲けり。

の如きは主詞と叙述詞と叙、屬、とより成れるなり。

(一) 白き 鳥 面白く 鳴く。

(二) 庭 の 萩 美しく 咲けり。

の如きは主、主、屬、叙、叙、屬、の四部を具せるなり。

屬部が一個の語又は句より成れる事あり。白き庭の面白く、美しくの如きこれなり。之を屬詞と云ふ。屬詞には更に修飾の語句を添へて、雪より白き鳥この庭の萩極めて面白く鳴くはなはだ美しく咲けりの如く云ふ事あり。また屬詞が不全用言より成れる場合には、驚に似たる鳥叩くが如く鳴くの驚に叩くがの如き補足詞を要し、其他用言より成れる場合には、主を失ひし萩姿を亂して咲けりの主を姿をの如き目的詞を要す。屬部とはこれら一切を引きくるめての名

稱なりと知るべし。

一つの單文は其叙述詞が不全自用言より成れる場合には左の六成分を含む事を得。

○主詞……………

主部

△主の屬部……………

○補足詞 零語補

△補の屬部 零語補 屬

○叙述詞……………

叙述部

△叙の屬部……………

今例を擧げてこの六成分の組み合わせを示せば

△かの 船 は 富士艦 なり。

は主、主、屬補、叙の四部より成れるなり。

△かの 船 は 有名なる 富士艦 なり。

は主主、屬補補、屬叙の五部より成れるなり。

練習

一、左の文はいくつの成分より成れるか。(一)主、屬、(二)主、(三)叙、屬、(四)補、屬、(五)補、(六)叙の順序に従ひ口頭にて之を列舉せよ。屬部若し屬詞以外の部分を含みたらん場合には一一其關係を明かに語るべし。

(一)かの黒き馬は意外にも昨日の競馬にてチャンピオンに成れり。

(二)繭はぐるぐるとわがねられたる一筋の糸より成れる橢圓形の小さい玉なり。

(三)暴君はいづれの國にもいと多かり。

二、屬部とは如何なるものを云ふか。

三、四成分より成り自用言を叙述語に有てる單文五個を作れ。

四、六成分より成り自用言を叙述語に有てる單文五個を作れ。

五、左の文にそれぞれ似合はしき屬部を添へよ。

(一)花一輪園に咲けり。

(二)軍人歸り來る。

(三)水蒸氣雲となる。

(四)忠臣は孝子の門より出づ。

(五)忠臣は二君に仕へず貞女は兩夫にまみえず。

第九課

一つの單文は、其叙述詞が常の他用言より成れる場合に於て、左の六成分を含む事を得。

○主詞……………

主部

△主の屬部……………

○目的詞 畧語目屬……………

△目の屬部……………

○叙述詞……………

叙述部

△叙の屬部……………

今例を擧げてこの六成分の組み合わせを示せば、

△僕 の 飼犬 は 常に 猫 を 追ふ。

は主、主、屬、目、叙、叙、屬の五部より成れり。

△僕 の 飼犬 は 常に 隣家 の 猫 を
追ふ。

は主、主、屬、目、目、屬、叙、叙、屬の六部より成れるなり。

一つの單文は其叙述詞が不全他用言より成れる場合に於て左の八成分を含む事を得。

○主詞

△主の屬部

主部

○目的詞

△目の屬部

○補足詞

△補の屬部

叙述部

○叙述詞……………

△叙の屬部……………

今例を擧げてこの八成分の組み合せを示せば

△有名なる 歴史家は 皆 楠木正成 を

英雄 と 認む。

は主、主、屬、目、補、叙、叙、屬の六成分より成れるなり。

△有名なる 歴史家は 皆 忠義無雙 の

楠木正成 を 古今第一 の 英雄 と 認む。

は主、主、屬、目、目、屬、補、補、屬、叙、叙、屬の八成分より成れるなり。

第三五節に屬部に就きて云へる事は、主詞と叙述詞との屬部のみならず、補足詞、目的詞の屬部にも應用しうべきものなり。且つ屬部はいづれに限らず、一つの牀言又は用言に

二つ以上同時に別々に添へらるる事あり。次の如し。

(一) 鷺に似たる鳥。

雪より白き

(二) 姿を亂して咲けり。

うつくしく

(三) 英國より歸航せし富士艦なり。

有名なる

隣家の

(四) 三毛の猫を。

愛らしき

單文中に於ける語句の配列の順序は、(一)主、屬、(二)主、(三)叙、屬、(四)目、屬、(五)目、(六)補、屬、(七)補、(八)叙、となるを順序とす。されど

も語氣を強くするため、または語調を柔軟にするためなどにて、この序次を轉する事稀ならず、「この日を忘るな」と云ふべきを「忘るなこの日をと云ふ類なり」。

練習

一、左の單文を前課の練習にてせし通りの方法に依りて各其成分に口頭にて分解せよ

(一) 教育學を修めたる人は今の世に少からず。

(二) 中村氏の令息は三個の誠に美しき寶玉を購へり。

(三) あまりに廉價の品物を購ふ者はかへつて大なる損失を招く。

(四) 昨日の圍碁は誰の勝になりしか。

(五)後に乞食と成りし美人の歌よみは誰ぞ。

二、六成分より成り他用言を叙述語に有てる單文五個を作れ。

三、八成分より成り他用言を叙述語に有てる單文五個を作れ。

第十課

文をば其成分に分解するを解剖と云ふ。第八課と第九課との練習欄に於て、口頭にて解剖する方法を示ししが、本課に於ては、筆頭にて圖式を用ゐて解剖を行ふ簡易なる一つの方法を示すべし。この圖式を解文圖式と云ふ。

(一)鳥鳴くを

〔鳥〕〔鳴く〕

(二) 萩 咲けり を 萩 (咲けり)

(三) これは船なり を (これは) (船)なり

(四) 水 氷となる を 水 (氷)となる

(五) 犬は猫を惡む を 犬は (猫)を (惡む)

(六) 猫鼠を捕ふ を 猫 (鼠)を (捕ふ)

(七) 寒氣は水を氷となす を (寒氣)は (水)を (氷)となす

(八) 彼は鹿を馬と云ひき を (彼は) (鹿)を (馬)と云ひき

これらの例に就いて一考せば、主には〔 〕を用ゐ、叙には〔 〕を用ゐ、補には〔 〕を用ゐたる事知られむ。この事の外、各括弧内のことば、語に非ずして句なる時は助辭の上肩に。をを加へたる事、及び各括弧の横幅同一にして縦に垂直に並べら

れたる事をも知られざるべからず。

(一)「白き鳥面白く鳴く」を

白き
面白く
鳥
鳴く

(二)「これは新しき船なりや」を

新しき
これは
船なりや

(三)「僕の犬は隣家の
猫を惡む」を

僕の
隣家の
犬は
猫を
惡む

(四)「烈しき寒氣はいつも瓶
の水を堅き氷となす」

烈しき
瓶の
堅き
いつも
寒氣は
水を
氷となす

これらの例に就いて考ふる時は、主目補叙のいづれに添ふ
屬詞も□に入られ其屬する語の右側に短き水平の一
線を隔ててそれぞれ配置せられたる事及び各屬詞は同一

の垂直線の中に同じ横幅を有たせて並べられたる事知らるるならん。また標の用ゐる方は前條に於けると異なる所なし。

(一)この庭の萩はなはだ美しく咲けり」を

この 甚だ

庭の 美しく

萩 咲けり

雪より 至つて

白き 面白く

鳥 鳴く

鶯に似たる 叩くが如く

鳥 鳴く

(三)鶯に似たる鳥叩くが如く鳴く」を

(四)主を失ひし萩姿を亂して咲けり」を

萩 咲けり

主を失ひし姿を亂して

〔五〕不意におのが主を見失ひし犬いたく

その心を亂して吠えまはれり」を

己が 不意に その いたく

主を見失ひし心を亂して

犬

吠えまはれり

これらの例に就きて一考せば、屬部の扱ひ方明かに知らるるなるべし。即ち屬詞に附く修飾の語句は〔 〕に入れて其右側に置く事、屬詞に係る補足詞は〔 〕に入れて更にその〔 〕内に圍ひこむ事、屬詞に係る目的詞は〔 〕に入れて〔 〕の上に直に据うる事等、會得せらるべきなり。

〔一〕隣家の三毛の愛らしき猫を」を

隣家の 三毛の 愛らしき

猫を

〔二〕方向を變じて昨日より一層美しく咲けり」を

昨日より一層

〔方向を〕變じて

美しく

咲けり

〔三〕今朝英國より無事に歸國せし有名なる學者なり」を

今朝無事に英國より

歸國せし

有名なる

學者

なり

これらに就きて考ふれば、一つの躰言又は用言に同時に別別に添へらるる屬部は、いくつにても別々に右側に同列に書き下さるべき事、明かに知らるるなり。

練習

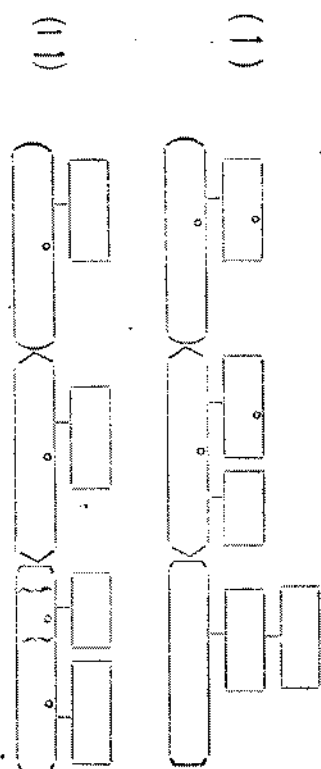
左の文を解剖圖式に依りて分解せよ

(一)世間の人々は非常に足下の義侠心を賞讃せり。

(二)横濱なる某會社は年々大量の羽二重を越前より取りよす。

(三)源頼朝は愚かにも天下の大權を自分一個の手にとごとく掌握せんとせり。

二、左の圖式にそれぞれ適當なる文を簞めよ。



第十一課

一つの單文にして他の語句の上に從屬する事なく獨立的に事を叙するものを獨立文と云ふ次に掲げたるはいづれも獨立文なり。

△花 美しく咲けり。

△ 鶏もとく鳴け。

△主人 未だ眠りたまはずや。

一つの單文にして、連躰詞と同じく他語の上に從屬的に

連續するものあり。之を連躰文と云ふたとへば、

△吾々が住まへる所は濕地なり。

△汝等も風雨の今すこし止まん時を

待て。

に於ける「吾々が住まへる」風雨の今すこし止まん」の如きこれなり。

連躰文の主詞は助辭の又はがを以て終はるを法とす。また連躰文には其連續する躰言を移して、目的詞又は補足詞に用ゐるに非れば意味の纏まらざるもの多し。たとへば、

△彼が往くべき國はフランスならん。

△君の買はれし家は西洋館なりや、

の「彼が往くべき」君の買はれし」の如し。かかるものを不全連

躰文と云ふ。

連躰文は、連躰詞と同じく、其連續すべき躰言を攝して、躰言と同じく用ゐらるる事あり。之を成躰文と名づく。次の圈點を施せるものは、即ちこれなり。

△僕。の。犬。を。恐。る。る。(事)は君。の。猫。
を。嫌。ふ。(事)より甚し。

一つの單文にして連用詞と同じく、用言の上に從屬的に連續するものあり。之を連用文と云ふ。たとへば、

△吾等 は 雨 いか に 強 く とも 行 か む。

△人 あまり に 多 く 赴 か ば 謀 行 は れ じ。

に於ける「雨」いか に 強 く とも 「人」あまり に 多 く 赴 か ば の 如 き 此れなり。

(注意)

「風雨の今すこし止まん」の如きは、之を文として扱はん事、見方によりては正しと云ふべからざれども、今は説明の便宜に随ふ時をり、ころゆゑ、ための如き連用の鉢言(二九節参照)に連續せる連鉢文は、之を合して一つの連用文を成せるものと見るもよろし。その場合には連用の鉢言は、ばどどもの如き一つの接續の助辭と同じ任務を盡すなり。

練習

- 一、獨立文に定義を下せ。
- 二、連鉢文に定義を下せ。
- 三、成鉢文に定義を下せ。
- 四、連用文に定義を下せ。
- 五、左の文はいくつの文より成れるか各文の種類をかた

れ。

△求麻の地は極めて深き山の中なる廣大なる平地なりそのわたりは別に一世界を成せる仙境なり他國にいて入る路は主に求麻川筋なりこの川の傍に山路あれどもそは至つて險惡なり。

六、以上の文を一々圖式に書き顯はすべし。

第十二課

連躰文、成躰文、連用文の三つを總稱して附屬文と云ふ。附屬文の内、いづれに限らず、一個又は二個以上が、一個の獨立文と合して、一種混淆の文をなす事あり。之を混合文と云ふ。混合文の解剖を行ふに、口頭を以てする時は、まづ其中の

(56)

獨立文を求め、常の單文に於てするが如く之を分解すべし。この場合に於て、附屬文として成牀文のあらんをりは、之を主語、目的語、或は補足語と見做し、又連牀文又は連用文のあらんをりは、之を連牀語或は連用語と見て、一旦それぞれ分類しおき、獨立文の分解果てての後、再び附屬文の分解に取りかゝるべし。

附屬文の分解の際は、獨立文に於て爲すと同一の順序を履むべきものにして、若し其附屬文に、更に他の附屬文の附着せる事を認めば、初めのものを姑く獨立文の如くに扱ひて、前條の手續を行ふべきなり。

圖式によりての混合文の解剖は、これより遙に簡短にしてしかも遙に明晰なり。今左に其用例を示さむ。

(57)

(一)「かの少年は既に太陽も一つの恒星なるを知れり。」を

かの

少年は

太陽も
「一つの」
恒星なる。を

既に

知れり

(二)「僕の犬を恐るるは君が猫を嫌ふより甚し」を

僕の
犬を
恐るる。は

甚し

君が
猫を
嫌ふより

これらに就きて考ふれば成牒文は其有せる最後の助辭を除きては、一旦常の單文の通りに分解せられ、然る後、前に除かれたる助辭と共に併せて一個の主詞、目的詞、補足詞、又は修飾用の連牒詞又は連用詞として扱はるべき事明かに知

らるべし。

(二)君の昨日購ひたまひしランプは極めて不廉なり。を

君の購ひたまひし

昨日

極めて

ランプは

不廉なり

(三)雪まじりの雨少し止まば汝も直に來れ」を

雪まじりの

雨

少し

止まば

直に

汝も

來れ

これらに就いて考ふれば、連駄文及び連用文は、一旦常の單文の通りに分解せられ、然る後其全駄は□□に入れられ、一個の連駄詞又は連用詞と同じく扱はるべき事知らるべし。

練 習

一、左の文を圖式に依りて解剖せよ。

(一)親の子を思ふは子の親を思ふに勝れり。

(二)大國を治むるは小鮮を煮るが如し。

(三)印度は熱帶の地方なれば決して水のこほる事なし。

(四)月の太陽の光を遮るを日蝕と云ふ。

(五)蜘蛛の網を張るを見るは極めて面白し。

二、左の文に、適當なる附屬文を添へて混合文を作れ。

(一) 化學は……………學問なり。

(二) 鯨は……………動物の最も大なるものなりや。

(三)……………時、余は不在なりき。

(四) 彼も……………必ず良き人と成らん。

(五)……………節生が必要なり。

三、左の圖式に適當なる文を篋めよ。

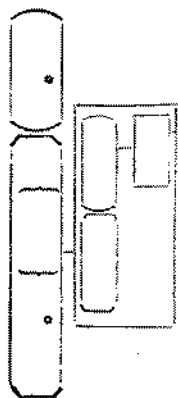
(一)



(二)



(三)



第十三課

一つの單文の主部の示せる状態又は行爲に關して、其叙述詞の事を叙する様に「花咲けり」、「鳥鳴く」の如く、そのまま平かに叙する事あり。「花は咲けりや」、「鳥よ鳴け」の如く問ひかけ又は勧め誘ふあり。かく叙述の姿のいろいろなるを引きくるめて、叙述の話法と云ふ。

叙述の姿に種々の差別あるが如く、其叙述の時にも亦種類のわちあり。「花咲けり」、「鳥鳴けりや」などは現在に就きて云ふなり。「花や咲きし」、「鳥も鳴かざりき」などは過去に就

(62)

きて云ふなり。かく叙述の時のいろいろなるを、引きくるめて、叙述の時相と云ふ。

同一なる話法及び同一なる時相を有する用詞を以て終れる二個以上の獨立文は、連續的に聯ねらるる事あり。たとへば、

△梅は品よし。

△櫻は婀娜なり。

を、梅は品よく櫻は婀娜なり。

と云ふ類なり。かくて作りなさるる文を獨立の複合文と云ふ。

獨立の複合文を作るに當りては、元の各の單文中に通有なる成分は、其一つのみを止め、他は悉く之を除き去る事、往々あり。次の如し。

(63)

(一)

△櫻美しく咲けり
△桃美しく咲けり
を「櫻と桃と美しく咲けり」。

(二)

△余は月を賞せず
△余は花を賞せず
を「余は月をも花をも賞せず」。

(三)

△君は弟を商人になししか
△君は弟を軍人になししか
を

「君は弟を商人若しくは軍人になししか」。

(四)

△前途なほ遠し
△前途益困難なり
を「前途なほ遠く且つ益困難なり」。

(五)

△この畫は高尚なり
△この畫はしかもはてやかなり
を

「この畫は高尚にしてしかもはてやかなり」

複合文にして、かくの如く約められたるを緊約複合文と云ふ。

練習

一、次の文の時相の誤を正し其理由を説明せよ。

(一)昨日買ふ本はここにあり。

(二)明日も多分雨天なりしならん。

(三)地球は古來西より東に廻轉せしか。

二、次の文を命令の話法に改めよ。

(一)君は益勉強なり。

(二)中村君も行かず。

(三)君は何も買はぬか。

三、次の文を緊約せよ。

(一)二三羽の鳥さゝやかなる水たまりを見あてたり彼等は水を飲まんとて降り來りたり。

(二)米は支那に多量に産す米は日本に多量に産す米は印度に多量に産す。

(三)オーストラリヤの東の海岸は荒れたりオーストラリヤの東岸は入江に富めり。

四、左の單文を綴りて一つの複合文を作れ。

(一)その島は無人島とおぼしかりき。

(二)島人は次第に數群を成して海岸に集まりき。

(三)島人は其生來の遠慮を捨てき。

(四)島人は吾等を非常に手あつく待遇しき。

(五)彼等は其島の種々の物産を吾等に贈りき。

五、右の文を圖式にて記せ。

第十四課

二個以上の單文の一つに連結せらるるは、獨立文の間のみ行はるる事にあらず。同様なる條件の具はりたらん場合には、附屬文の間にも行はれうべき事なり。次の如し。

(一)

△君の犬を嫌ふは一つの病なり
△僕の猫を嫌ふは一つの病なり

を

「君の犬を嫌ひ僕の猫を嫌ふは共に一つの病なり」。

(二)

△彼は眼の丸き人なり
△彼は鼻の大なる人なり

を

「彼は眼の丸く且つ鼻の大なる人なり」。

(三)

△余も雨止まば行くべし
△余も人來ずば行くべし

を

「余も雨止み且つ人も來ずば行くべし」。

かかる文を附屬の複合文と云ふ。獨立の複合文と附屬の複合文とを概稱して單に複合文と名づく。

附屬文の連結せらるる場合に於て、連結せらるべき文の各に通有なる成分ある時は、其中の一つを存して、他をば悉く省畧する事あり。獨立文の連結のをりに同じ。たとへば、

(二)

△君の犬を嫌ふは病なり
△君の猫を嫌ふは病なり

を

「君の犬と猫とを嫌ふは病なり」。

△彼は眼の丸き人なり
 △彼は眼の大なる人なり
 を

「彼は眼の丸く且つ大なる人なり。」

△余も雨止まば行くべし
 △余も風止まば行くべし
 を

「余も雨と風とともに止まば行くべし。」

又は「余も雨か風か一方止まば行くべし。」

語句又は文の間に立ちて其接續を掌れる且つ、もしくはと……としてあるひは、も……もまた、か……かの如き語を接續詞と云ふ。常の複合文又は緊約複合文を作るに當りては、其所要の意味を言ひあらはさんため、接續詞を用ゐ、また共に、一方など云ふ連用詞を用ゐる事、往々必要なり。

(注 意)

「余は山田なり、主人は居たまふか」を合して、余は山田なるが、主人は居たまふかと云ひ、「彼は牛乳を好まず、彼は牛酪を好む」を合して、「彼は牛乳を好まざるに、牛酪を好む」と云ふ時に於けるが、此の類も、亦接續詞として扱ふべし。

練習

一、左の文を緊約せよ

(一) 光は人生の必需品なり、空氣は人生の必需品なり。

(二) 父に事へて順良なるを孝と云ふ、母に事へて順良なるを孝と云ふ。

(三) 咳嗽止まずば危険ならん、發熱止まずば危険ならん。

二、左の緊約複合文を還元せよ。

(一) 正成と正行とは父と子となり。

(二) 二人にも馬にも深手もすり疵もなかりき。

(三) 彼か彼の弟かはイギリス語かフランス語かを知れり。

三、左の文を圖式を以て分解せよ。

(一) この井の水は極めて淺けれどもなほ底は見えず。

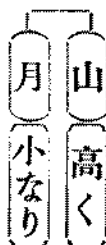
(二) ナポレオン一世は彼がオースタリヤの皇女なるマリヤ、ルイサと結婚せし後其子をローマの國王と成しき。

第十五課

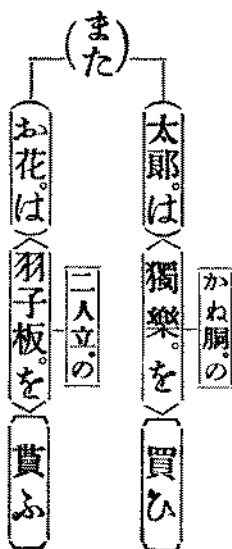
通常の複合文を口頭にて解剖するには、先づ之を二個以上の單文、又は混合文、或は單文と混合文とに引き分け、しかる後、各單文又は混合文に就きて既に示したる手續に従ひ、

一々分解を行ふべし。而して圖式を用ゐての解剖は次々に示す通りに爲すべし。

(一)「山高く月小なり」を

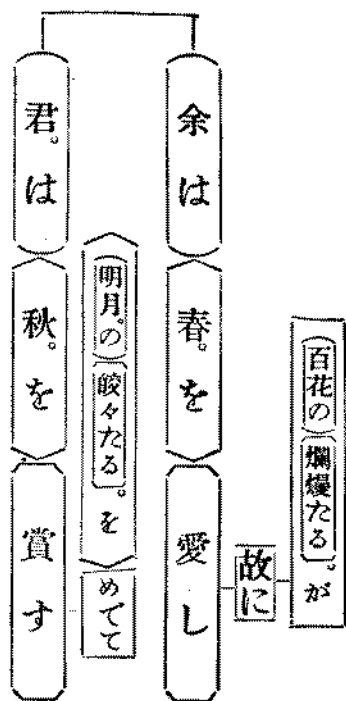


(二)「太郎はかね胴の獨樂を買ひ、またお花は二人立の羽子板を貰ふ」を



(三)「余は百花の爛熳たるを以て春を愛し君は明月の皎々

たるが故に秋を賞す」を



これらの例に就きて見れば、複合文を解剖するには、常の單文又は混合文を扱ふが如くにし、其中の獨立文と獨立文とを□を以て連結すべき事、及び文と文との中間に立てる接續詞ある時は、之を（）に入れ□の中央に挿むべき事、直に知らるべし。

次に緊約複合文を分解する場合には、「梅と桃と美しく咲けり」前途遠く且つ困難なりに於ける梅と桃と、遠く且つ困難なりの如き、緊約せられざる部分をば、接續詞あるをりには之をも併せて、一つの主目補叙又は其屬部と見做し、全牀を一つの單文若しくは混合文と同様に取り扱ふべし。圖式に依りての解剖の主義も亦これと異なる所なし。

(一)「室の桃と園の梅と美しく咲けり」を

室の

園の

美しく

桃と梅と

咲けり

(二)「前途甚だ遠く且つ極めて困難なり」を

甚だ

きはめて

前途

遠く且つ困難なり

(三) 君の犬と猫とをむごく扱ふは善からぬ習はしならずや。

善からぬ

君の(犬と猫とを) むごく 扱ふは

習はしならずや

(四) 彼も雨か風か一方止まば必ず明日の朝までに來るならん。

明日の

一方

(雨か風か) 止まば

必ず

朝までに

(彼も) 來るならん

(五) その男は必定余が善く知りてもをり且つ尋ねてもをれる某國の亡命者ならん。

その

余が知りてもとり且つ尋ねてもをれる

某國の

必定

男は

亡命

者一ならん

これらの例に就きて一考せば、緊約複合文の如何に扱はるべきかは、たやすく理會せらるべし。

練習

一、左の文を圖式を用ゐて分解せよ。

(一) 本年は米と麥との收穫は十分なり。

(二) 夜はいたくふけ余等は途を失へり。

(三) 余も余が下男も鐘の音も聞かず讀經の聲も聞かざ

りき

(四) 明治廿八年の五月の十三日は平壤に黃海に旅順に

蓋平に比類なき勦を爲して戰死せる陸海軍の軍人の爲に四千万の同胞が殊に哀悼の念を起したる日なり。

(五)亞細亞に又なきこの島國に

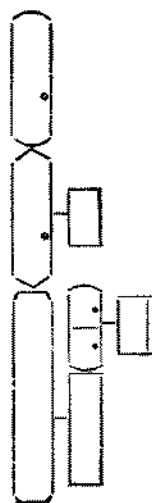
天の恵で生れしものは

幼き時より海には慣れて

あらしも恐れず波にも怖ぢず。

二、左の圖式に適當なる文を籤めよ。

(二)



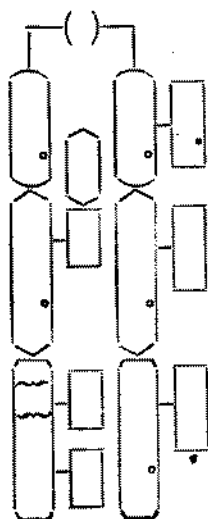
第十六課

△瓢 や 瓢 や われ 汝 を 愛す。

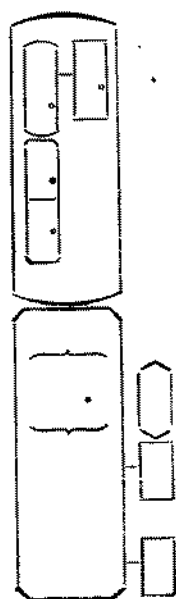
△わが 親愛なる 學生諸君 よ。諸君 は 決して
光陰 を 無益に 費す べからず。

この二つに就いて、瓢、學生諸君の如き語は、「われ汝を愛す」諸

(三)



(三)



君は決して光陰を無益に費すべからずの如き文を成せる語のあつまりの外に獨立せる語なり。かかる語を獨立語と云ふ獨立語は、助辭之に添はりて獨立句を成すが常なり。

△象 は その 形 きはめて 大なり。

△春 と 秋 と 余 は 其 いづれ をも 棄て

がたし と 思ふ。

△駿遠 の 山 その 谷 は 深く 其 森 は

茂れり。

この三つに就きて、象、春、秋、山、の如きは各一つの獨立語なり。これらの語の前條に擧げたるものと異なる點は、彼は呼びかけの獨立語にして、これは提示の獨立語なるにあり。提示の獨立語も、亦助辭と合して獨立句を成す。

獨立語と獨立句とを概稱して獨立詞と云ひ、獨立詞を補修するための目的詞、補足詞又は之に添ふ屬部と獨立詞とを引きくるめて**獨立部**と呼ぶ。

獨立部を解剖するに當りて、口頭にては、其、某の文に對する獨立部なる由を述べて後、之を常の主部を扱ふが如くにすれば足れり。また圖式を以てする時は、

(一)「わが親愛なる學生諸君よ、諸君は光陰を無益に費すべからず。」を

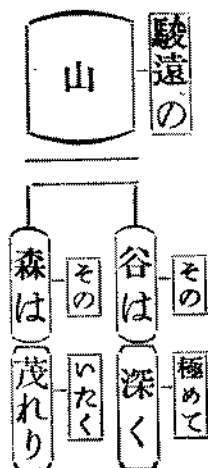
わが親愛なる

學生諸君よ

— 諸君は光陰を費すべからず —

無益に

(二)「駿遠の山その谷は極めて深く其森はいたく茂れり。」を



これらの例の示すが如く獨立詞を主詞と同じく取扱ひ、其對せる文の上部に水平の一線を隔てて据うべきなり。而して、獨立詞の屬部の扱ひ方などは、一に主詞のと異なる事なし。

△嗚呼 悲しい かな。

△あはれ 亡き 跡 吊ふ 人も なし。

これらの中にて嗚呼あはれの如きは喜怒哀樂の情に迫りて、吾等の發する感動の聲を示すものなり。かかる發音は仔

細に述べんには多くの語句を要すべき長き心ばえを、簡短なる形に約めたらんが如き性質のものなれば、之を花行くの如き語と同一に視んは穩かならず。よりて今姑く之を感動詞と名づく。感動詞も獨立詞と同じ様に解剖すべきなり。

(注 意)

「いな、余はさる者に非ず、いでやこの世のおもひでに矢一筋うらみまゐらせん、そもそもこれは平家方に弓矢の譽隠れなき武夫なり、等に於けるい^いないでや、そもそもの如き語は感動詞に似たるものなれども、なほ之を常の連用詞と見る方、穩かなりとす。

練習

一、左の說話の中の一々の文を圖式を以て解剖すべし。

但し文に省略せられたる部分あらは豫め之を補ひおくを宜しとす。

「ある時一羽の鳥いづくよりか一片の肉を啣へ來り大なる樹の太き枝の上にありて之を喰はんとせりこの時一匹の狐其樹の下を過ぎいかにもして鳥の有てる肉を欺き取らんと思ひ鳥に向ひて云ふおん身の羽の色と翼の恰好とは比類なく美しさればおん身の聲も定めて期かなるべし何とぞ一聲鳴きて聽かせたまへと云ひかけしに愚なる鳥は之をまことなりと思ひうれしさの餘りにがと口を開きしかば啣へ居たりし肉は忽ち地上に落ちたりあないかにせんと思ふ程に狐は肉を拾ひてあはれおん身は

比類なく賢き鳥よと悪口を残していつくにか逃げ
失せにき。」

二、獨立部とは何ぞ、

三、感動詞とは何ぞ、

明治十一年十一月一日

新撰日本文及文の解剖

解

三

明治三十八年八月十九日印 行

明治三十八年八月廿二日發 行

明治四十年五月三日再版發行

著 者

發行 者 兼

發 行 所

印 刷 所

大賣捌所

大賣捌所



岡 倉 由 三 郎

東京市本郷區丸山新町十六番地

三 浦 理

東京市神田區錦町二丁目十九番地

有 朋 堂 書 店

東京市神田區錦町二丁目十九番地

一 心 堂 活 版 所

東京市神田區錦町三丁目二番地

三 省 堂 書 店

東京市神田區裏神保町一番地

三 宅 莊 藏 書 店

大阪市東區南本町四丁目一五二

